生徒と共に

言葉の力

若い世代の学生・生徒たちが、メールに夢中になっている光景は日常的である。歩きながらでも電車の中でも眼は文字盤に釘付けである。登下校時の生徒同士の賑やかな会話姿も過去形になりつつある。昨今、この文字盤を介した言葉のやりとりが背景にあると思われる事件、事故が毎日のように報じられており、心が痛む。子どもの頃からの何気ない日常の会話や体験から、喜びや悲しみ、達成感や挫折感、痛みや心地よさなど言葉への感性が育まれていくものである。言葉は文字羅列化し、自分の考えや思いを伝える生きた言葉になっていないように思われてならない。高校生たちの間で飛び交う記号化された言葉が気にかかっていた時期、新聞で「朝起きて、誰もいない台所にポツンと置いてあるまだ温かいお弁当、もう少し早く起きたらありがとうと言えたのに」という男子高校生の投稿を目にした。素直に伝えられないでいる母親への、感謝の気持ちと優しさのこもった言葉に癒され、何度も読んだ。

我が若き頃の不明の言葉から起きた、今も忘れられない体験がある。三十数年も前、教育実習から二週間ほど経て、我が家にかわいい訪問者があった。担当した小学校一年生のY君であった。「先生が子どもとのお別れの時、近くに来た折りはいらっしゃいと。子どもにせがまれて伺いました。」伴ってきた父親から丁寧な挨拶を受けた。驚くやら嬉しいやら、そして自省の念が交錯した一瞬であった。純粋な児童たちに発した外交辞令の不用意な発言に恥じた体験だったが、その後、Y君からの高校、大学、社会人へと時節毎に届く近況報告の挨拶状は私の教師人生を支えてくれた。

また、高校教師駆け出しの頃、曖昧な言葉による苦い体験もあった。事の起こりはH君に課したレポートの提出期限をうっかり日曜日に設定してしまったことからだった。彼はこれに気づいて「月曜日でもいいということですね。」と。私、「いいえ、土曜日までに頑張ってきなさい。」結局、土曜日には提出されなかった。ところが日曜日の昼頃、家の電話が鳴った。H君からで、期限までに課題を届けるべく自転車で来たとのこと。彼がかけてきた公衆電話の場所まで迎えに出た。こうして我が家にてレポートが確かに提出された。彼は息子たちとお昼を囲んだ後、再び二十数キロの帰路についた。無事自宅に着いたとの連絡にほっとした日のことを思い出す。生徒への不適切な発言を大いに反省した事件であった。彼は卒業後、法学部に進み外務省に勤務したとの風の便りに、活躍を祈った。

この三月は、次に紹介する二つの言葉に出会った。「春はたくさんの挨拶を聞く時期、聞く人はその言葉を聞いているのではなく、その人のやってきたこと、言葉の寸法を測っている。ぴったり一致していたり、言葉の方が慎ましくも小さかったりした時、いいなあ、本当のことを聞いたと思う。」という自身に問いかける言葉。「たくさん叱ってくれてありがとうございます。おかげで今の自分があります。」という卒業式で生徒から贈られた言葉である。これまでの教師生活で、最も感動し、これ以上の言葉はなかった。突然の卒業生からのこの言葉に、先生方は込み上げてくるものを押さえきれず、まさに涕泣だった。生徒と教師が同じ想いを共有した言葉だったからである。

今回の原稿依頼で、教師生活を振り返る機会をいただき、生徒から届くメッセージが教師の「生きる力」となっていたことを再認識した、教師三十七年目の〝熱い〟夏だった。

栃木県立足利女子高等学校　田村和江

実践活動の中から得た教訓

教師生活の中で忘れることのできない思い出は、県立栃木工業高校の創立三十周年記念事業の一環として行った、「タイボランティア活動」である。この活動には準備段階から十数年間にわたってかかわった。一九九一年二月に第一回の活動が開始されてから、まもなく二十年目を迎えようとしている。

この活動は、生徒たちが学んでいる技術を活かし、直接タイ王国の福祉施設に出向き、施設の壊れた車椅子を修理すると同時に、地域の福祉施設から寄贈された、中古の車椅子を修理して寄贈する活動である。この活動を通して、生徒たちが修理し、寄贈した中古車椅子は二〇〇八年六月現在千七百台近くになる。一方、栃工高から始まった「空飛ぶ車椅子」（中古修理車椅子の寄贈活動）は、全国五十六の高校へと活動の輪が広がり、約五千台を超える車椅子が協力団体を通して、東南アジアを中心とした福祉施設に寄贈されている。この活動は現在も継続され、活動範囲はさらに広がっている。

この活動背景には、これから到来するアジアの時代に向けて、日本とアジアの国々の歴史的背景を理解し、欧米崇拝方の目線ではなく、アジアの人達と同じ目線に立って、物事が見られる生徒たちを育てたいという、校長の熱い思いがあった。

だが、当時は、高校生の東南アジアへのボランティア活動は困難とされていた。協力依頼に訪れたJAICAを始めとする十数ヶ所の国際協力団体が、一様に一地方の工業高校の活動に驚きと賞賛の声を寄せてくれたが、協力してくれる団体はほとんどなかった。今日、三千社近い日本企業が進出している現状など想像すらできなかった。まさに、当時の校長の大英断であった。

この決断を目の当たりにした者として、後に裁量権者の先見性と決断力がいかに大切かを知ることとなった。

以後、この実践活動を通して、学んだ教訓を挙げてみたいと思う。

一つ目は、この活動の唯一の協力者が話してくれた言葉である。『活動を開始したら、一年で止めてしまわないこと。もし、一年で止めてしまったら、あの学校は〝海外研修〟へ行っただけ。』と言われ、三年継続すれば『あの学校は〝海外研修〟へ行って、何か研修実績を上げているらしい。』と言われるようになるでしょう。五年継続すれば、『あの学校は〝海外研修〟へ行って、このような実績を上げていると、活動成果が評価されるでしょう。』。そして、『十年継続できれば、活動実績・評価と貴校の道ができるでしょう。』、『開始したら、三年間は是非継続して下さい。』そして、『継続につながる若い後継者を育てることを忘れないでください。』と言われた。

二つ目は、「教師は、生徒たちに色とりどりの種子をどれだけ持ち、それを蒔くことが出来るかではないか」ということである。そして、「蒔いた種子をいかに結実させるか」である。それには、「種子をまく人、水をやる人、育てる人、励ます人」が必要だとよく言われる。この生徒たちを育成する「学社連携」の輪を作るのに、学校は最適な場所だと思っている。

また、これらの活動を通して、生徒たちは国内外の多くの人達との出会いの中で、自己実現に向けての「気づき」をもらい、異文化理解をし、「共に生きる」ことの大切さを肌を通して身につけている。しかし、どんなに時代が変わっても、教師が根底に持っていなければならないものは、生徒を愛し、一人の人間として「共に学び合おう」とする心ではないかと思っている。

栃木県立宇都宮工業高校　　穐　山　幸　一

教員になった日

大学四年、仲間たちも故郷での就職活動を始める頃、私は何となく流れの中で採用試験を受けたためか、卒業後教員になる実感が沸いたのは勤務先の通知を受け取った後だった。はっきりとした抱負も自信もやる気も確認できない不安な心境のまま、赴任地へと向かった記憶がある。関東平野の真ん中で育ち、学生生活になじんでいた私が向かった県北の学校は、共学で普通・家政・農業・水産科を有する、地元に根差した学校であった。山間を抜けた丘の上に建っていて、行き着いた時の異環境ショックは今でも新鮮に覚えている。

漠然とした気持ちのままスタートする中、未だ自分の今後のあるべき姿を模索し、何時この状況から抜け出すかと考え悩んでいた頃に事件は起きた。職員玄関に向かって出勤途中、三年教室前を通り過ぎようとすると、「ホ～ッホ～ッ」と何度かこちらに向けた声が聞こえてきた。咄嗟に（私がからかわれていると感じた）次の瞬間、声の方へ走り出していた。一気に教室の窓を飛び越えると、廊下を逃げる後ろ姿から、当時番長と言われていたAだとすぐ分かった。教室を出て廊下を走り二階への階段を登り切ると、大柄なAは息を荒げながら私を威嚇する様に立っていた。私は息つく暇もなく、問答無用とばかりに「からかう気か：」と叱ると、Aは予想に反し「すいません：」と素直に頭を下げた。後にその時のホ～ッは、私の前を歩いていた外部の若い女性に向けた声だと分かったが、そんなことはどうでもよかった。Aが言い訳せずに謝ってくれたことと、今まで味わった事のない不思議な教師感覚が沸いてきた喜びを覚えている。

その後のAは多少の問題は起こしたものの、無事卒業し地元の会社に就職した。そして

数ヶ月後、突然、Aが事故で死んだとの知らせを聞いた。友人と弟を乗せ、停車していたトラックに追突し三人とも即死とのことだった。事故の状況は極めて悲惨でAの顔は左半分がない状態だった。訃報が届いた瞬間、就任後初めて本気で生徒と対峙したその瞬間の記憶が鮮明に蘇った。後に、残された妹が入学したが、Aの話は交わさないまま卒業した。

その後、私はあちこちの画廊を借り、美大時代の夢の続きを追いかけて個展を開いていた。そんなある日、突然Aの妹が会場に訪ねて来た。「新聞で先生の名前を見て兄を思い出し：」と大粒の涙を流しながら話を始めた。妹は結婚して子どももでき、すっかり母親の雰囲気を漂わせていたが、在学当時は事故の記憶を消したくて兄の話は：とも話してくれた。「兄は、生前、先生に叱られた話を繰り返し、自分を本気で怒ってくれたのは先生だけだ、もっと早く逢えていたら：と話していました。」と言うと、つかえていたものを吐き出したかの様に帰っていった。ただ、その場に残された私にはAに感謝されていたという想像外の喜びと、あの時の私の単純で身勝手な腹いせとも思える言動がAの為になったのかという気持ちが交錯し、そこには、教師？教育とは：？がよぎった瞬間でもあった。

今振り返ると、そんな出来事が後の私の教師生活を支えてくれた原点になった気がする。決して体罰や結果良しの指導は肯定できないが、全て目先の結果ばかりが求められる最近の傾向に、教師自身が周囲への気遣いに神経を擦り減らし、腰が引けた指導になり、生徒と正面から対峙する本来のあるべき姿が消えかけている様な気がする。社会・家庭教育が崩壊している今日、教師一人ひとりに課せられた使命は重く厳しいものがあるが、外野の評価や目先の結果を考え過ぎず、ひたすら生徒のためを思い、力いっぱいご活躍下さい。

栃木県立栃木女子高等学校　　五　月　女　政　巳

自然の中で体験活動を

経験が、人を育ててくれる。知識も経験を伴って初めて身に付く。

旧佐野市の北方に県立公園の唐沢山がある。そこを活動の場として、唐沢子供会という団体があった。小学校五年生の三学期から入会できる。そこでは、自然の中で活動するための知識と技術を教えてもらった。唐沢山近隣の小・中学校の先生方が指導者だった。

その知識と技術を身に付けるための実践の場が、夏のキャンプだった。中学生になると、移動キャンプといって、唐沢山以外の所でのキャンプになる。古峰ヶ原、塩原、日光のいわゆるキャンプ場ではない所でのキャンプをした。開拓キャンプともいった。

三泊四日を過ごすための、生活の場を自分たちで作る。テントを張る場所の整地から始まり、かまど、トイレ、調理場、洗濯物干し場。いかに工夫を凝らして作ったかを競い合う。表彰され、賞品まで出るのだから、夢中だ。火を熾(おこ)すことも、料理を作ることも、洗濯の仕方も、みんなここで覚えた。

教職に就いて、二年目で一年生の担任を任された。生徒たちには、自分の経験から、一人で生きてゆける力を身につけてほしいと思った。だから、もちろん勉強は頑張ってほしいし、常識も身につけてほしい、と願った。

でも、担任して最もやりたかったのは、キャンプに生徒を連れてゆくことだった。実行した。本当は二泊したかったが、管理職からの許可は、一泊二日。でも、「よく許可してくれたなぁ。」と後で思った。今になって、あのときの管理職の勇気がわかる。

夏休み。担任していた生徒の四十五人中、四十四人の参加を得て、奥塩原でキャンプを

した。生徒たちはみんな自転車で走ってきた。長距離で、しかも、長い上り坂。小川町からの生徒が、一番遠かったろうか。朝、暗い内に家を出て、着いたのが午後二時という生徒が最後。

夕食準備までの時間。遊びのリーダーが生まれる。疲れているはずなのに、その辺にあった生木を使ってボールを作り、サッカーが始まった。生徒たちの驚くべきエネルギー。

夕食は定番のカレーライス。調理から後片付けまで、生徒たちの行動を観察。キャンプに来てまで、担任として生徒の評価をするつもりはない。しかし、よくわかる。要領のいい生徒がいる、仕事の段取りの悪い生徒がいる。包丁の使える生徒、ご飯の炊き方がわからない生徒。いろいろだ。しかし、自然に、自分のできることを分担してやっている。

一人で生活できるようになってほしい、という私の願いが少しはかなえられたろうか。生活するために必要なことがわかったろうか。

夕食後は、みんなで相撲を取った。私も、副担任の先生と取った。その後、怪談話などをしながら、近くの共同温泉場に入りに行った。男同士の裸のつきあいだ、ホントに。

今、振り返ってみると、TVの学園ドラマのようだ。

修学旅行やクラスマッチ、学校祭に部活動。生徒にはいろんな体験活動をさせたい。ゲームや携帯電話など、機械類の目覚ましい普及。だからこそさせたい自然の中での活動。キャンプに行くのは、昔に帰るようだけど、後退ではない。生きる力がきっと身に付く。

人間は、自然の中の一部だということ。そして、あのキャンプを経験した生徒たちの自信を実感した夏の出来事である。

栃木県立田沼高等学校　　川　﨑　　勉

子どもたちの懸命な学びの姿から

長期間入院している子どもたちのために、病院内に分教室が設置されています。病気の治療をしながら学習する教室です。分教室には数名の専任の教師が常駐しています。子どもたち（小・中学生）が長期入院することになると、入院期間中、病室から教室（病室に隣接）に通うことになります。午後は、病気の症状によって教室に来られない子どもたちのために、教師が病室に行き、ベッドサイドでの授業など個別指導をしています。教師は、子どもたちが退院して元の学校に復帰したときに困らないように、一人ひとりの進度を考慮し学習を進めています。

子どもたちは病室という狭い空間に長期間閉じこもっていて治療を受けています。ややもすると、ストレスが溜まり気持ちが落ち込んだり何事にも消極的になりがちです。子どもたちが明るく元気に前向きに治療に向かい合い、学習に意欲的に参加するために、教師は様々な取り組みをしています。病院関係者と密接な連携を図り、常に各人の病状や心情を把握し、日常の会話等にも十分配慮をしています。学習が単調にならないよう、教材・教具にも工夫をこらし、実験・実習等も取り入れ、時には校外学習も実施しています。ここで行われている授業は、和気あいあいとした雰囲気の中で、子どもたちも教師も真剣で実に生き生きとしています。病院の担当医の話では、教室で学習するようになった子どもたちは、治療にもとても前向きになり、よい結果をもたらしているとのことです。

中学生のA君が人生の幕を閉じました。明るく何事にも前向きな性格で、懸命に勉強にも治療にも取り組んでいましたが、病状が悪化してとうとう帰らぬ人となってしまいました。なんとも悲しいどうしようもない現実です。いつも授業が始まるのを待ちかねて、早くから教室にきていました。得意な教科書の内容はすべて覚えてしまうほどでした。高校への進学に向けても頑張っていましたが、進学の夢は果たすことはできませんでした。

教室に出席できなくなっても勉強の意欲は衰えず、ベッドサイドに通って指導してくれる先生の指示に従い、最後まで頑張りました。担任を始め教師たちも心からA君の回復を願いつつ、お互いに心をかよわせ合いながら、力を入れず自然体で一歩ずつ可能な限りの指導・支援をしました。不安や辛いこともあったと思われる病床のA君が、最後まで希望と勉強への意欲を持ち続けていたことに心を動かされました。A君にとって分教室での勉強は心の支えであり、元の学校に復帰したときに困らないようにということだけでなく、学ぶ瞬間・瞬間がとても大切で価値のあることだったと思われます。

闘病中であっても、子どもたちは一人の人間として精神的に大きく成長してゆきます。それだけに、ここでの学びは純粋で貴重で大切なものです。私たち教師は、子どもたちのために、今できること・やらなくてはならないことを、本当に真剣に取り組まなくてはならないと、ここでの子どもたちの懸命な学びの姿を通して改めて痛感しました。

元　栃木県立栃木特別支援学校　　田　村　重　夫

心のふれあいで学んだこと

「先生は、どうして養護教諭になったのですか」と、生徒から、幾度となく質問を受けてきました。長い期間、理想的と思える返答をしてきました。生徒の心には響いていないことは感じており、そのうちに偽っていられなくなって、あるとき、正直に話すことにしました。第一希望の分野の大学には進学できなかったこと。受験科目が類似していて、受験したら合格したので入学したこと。何とも恥ずかしい進学理由だったのです。しかし、看護師の勤務体制は、体力的に無理があると受け取ったこと。看護師の国家試験合格を条件として、教育学部に養護教員養成課程がある大学の存在を知り、受験し直したという顛末であること、今はこれらのことを正直に話すようにしています。現在、高校での進学指導は、将来の職業に向けて進学を考えるのが正論ですから、私の進学理由など邪道なことです。こんな話は生徒のためにはならないと考え、封印してきたのかもしれません。

このように正直に答えてから、必ず付け加えることがあります。一つは、自分の進路は、いろいろな人に相談しても、最後は自分で考え、結論を出すものだということ。そして、出した結論は、できうる限り実現して欲しいこと。自分が熟慮して結論を出せば、不思議と困難を乗り越えられるものであること。二つ目は、高校卒業時に、このようなスタートが切れれば理想だが、自分から勉強したいという気持ちが大切で、決心した時が出発であることを話しています。このように、本心を話すようになってから、生徒との職業や進路についての相談・面接が充実してきたように思います。

A子さんとの出会いは、印象的でした。私が転任後まもなく、年度当初の保健行事や、総合学科の複雑さに不慣れで四苦八苦している時に、「先生、お疲れさまです。授業に出られる状態になったので、教室に戻ります。カードは自分で記入しました。先生は『この時間は休養していた方がいい』と言ってくれました。ありがとうございました。生理痛がさぼりではないと言って信用してくれて、とてもうれしかったです。先生もがんばってください。」と書かれたメモが机上に残されていました。原則として、生徒が休養している場合は、保健室を不在にしたくはないのですが、そのときはそうはいっていられない状況でした。また、前年度まで不登校気味であったという彼女が、養護教諭である私にこんな優しいメッセージを贈ってくれていました。その時の感激は、今でもはっきりと覚えています。その彼女が、いったんは会社に就職したが、養護教諭になりたくて進学したと報告に来ました。「先生が話してくれた、『自分の進路は自分で悩み、自分で決めなさい。そして出したことの責任は自分でとりなさい。そう決心したときが出発よ。』と言ってくれたので受験勉強をがんばれました」と、喜々として話している彼女は輝いていました。

私が話したことをこんなにも長く心に留め、努力し、実行してきた彼女に敬意を払うとともに、責任を感じているところです。

その時その時を、誠実に、正直に生きること。これが、三十八年間の教員生活から学び、これからもそうありたいと願っているところです。

元　栃木県立さくら清修高等学校　　大　谷　美　恵　子

舎生と共に歩んできた日々

定年を目前にして、寄宿舎指導員になれたこと、そして、自然がいっぱいの旧寄宿舎と設備の整った新しい寄宿舎で仕事ができる幸福を、今改めてかみしめています。

私は、野沢養護学校（現のざわ特別支援学校）が開校した昭和四十二年に、肢体不自由児について何の知識もないまま、寄宿舎指導員（寮母）になりました。仕事内容についても何も分からず、先輩指導員の方々の言動を見聞きしながら無我夢中で毎日を過ごしていたのが、つい昨日のことのようです。遠隔地の生徒が一〇〇名以上入舎しており、二十四ある舎室が満杯の状態でした。学校の周りは自然に恵まれており、よく散策に出かけたものです。川や野山へ出かけ蛇をつかまえて来る者や掘ってきた植物を花壇に植える者、懸命に絵を描いていた舎生もいました。帰省日は月一回だったので、大型バスで遠足にも出かけました。また、映画部・運動部・調理部などの部活動も活発に行われました。市内のデパートに行き、買物や食事をしたことも楽しい思い出です。舎生と年齢も近かったこともあり、宿直の夜など遅くまで話し込んでしまい、先輩指導員をハラハラさせてしまうことが多々ありました。今考えると、顔から火が出る程の無茶を沢山していたように思います。周りの方々から支えられていたから働けていたことも、後になってわかりました。指導員の仕事に意欲を持ち始めた昭和四十八年、育児のために断腸の思いで退職しました。

昭和五十六年、再び指導員として復帰できたときは本当に嬉しかったです。栃木養護学校（現栃木特別支援学校）に三年間勤務しましたが、家庭から離れ寄宿舎で頑張って生活

している子どもたちが一層愛おしく思えました。指導員長（寮母長）のA先生との出会いは鮮烈でした。寄宿舎教育の先駆者で、常に舎生を中心に考え、確固たる信念を持って仕事をされ、保護者の話にも十分耳を傾け支えておられたので、保護者からの信頼が厚かったのが印象に残っています。舎生のことを心から案じ、沢山の卒業生を社会に送り出した方の一言一言から多くのことを学び、舎生との関わり方も基礎から教えていただきました。栃木養護学校での三年間は、指導員の仕事を続ける上で大切な日々になりました。

昭和五十九年に野沢養護学校に戻って来た時は、舎生数は減少し介助を必要とする舎生が増えていましたが、基本的な生活習慣を身につけるため、一人ひとりに合った進め方をするように心がけました。排泄では、オムツをはずすことができた例が挙げられます。まず、排尿のリズムを把握し、定時にトイレに座ることから始めました。毎日繰り返すうちに、手を叩き体を動かしながらお話をするようになったので、座ることが不快ではないと確信が持てるようになりました。「焦らず・根気よく」その時を待ちました。「しゃー」の音に思わず中を見ると、確かに出ていました。拍手をしながら、「すごいね」と褒めると本人も嬉しそうな笑顔。私たち指導員は、舎生ができたときの笑顔が見たくて、この笑顔に励まされて仕事をしているのかもしれません。

卒業生から、「寄宿舎でしていた掃除や後片付け、いろいろな友達や先生と語り合ったり、一緒に活動したことが、卒業してから人との関係作りに役立った。」という言葉をいただきました。舎生に育てられ、舎生と共に歩んできた日々が私の人生の宝物です。

栃木県立のざわ特別支援学校　竹沢イネ子

「班ノート」から

定年を残すところ一年余り、仕事に追われ何とかこなしている現状を思うと、自分の力のなさに忸怩たる思いをするばかりである。そんな折、執筆の依頼があり、このような状況ではとても書くことなどできないというのが本音であったが、「教師」という仕事を終えようとしている現在、これまでに経験したことをまとめてみることも、私のけじめと考え書くことを決意した。そしてこれが、これから益々厳しくなる教育環境の中で活躍される先生方に、何か少しでも参考になるものがあれば幸いと思っている。

教師九年目に、それまでとは生徒の気質や校風の全く異なる学校へ転任し、すぐ担任となり、円滑なクラス経営をいかにすれば構築できるか、様々な資料を検討し悩んだ末に、「班ノート」を実施することにした。このノートは、私と生徒との交換日誌的な性格のものであり、生徒が自分の考えを整理したり、クラスメートとのコミュニケーションをとるきっかけになるものと考えた。重さで言うのも変ではあるが、三年間で約十kgになった。

具体的には、日付・天気・班の出欠・クラスの出来事・先生から受けた注意・学校行事、個人の欄では、起床時間・下校時間・就寝時間・下校後の生活や自分の考え等を書く欄・読んでいる本または読みたい本を書く欄がある。六名位で班を作り、朝提出し帰りまでに教師側がコメントして戻すものである。生徒は六日に一度位の記入なのであまり負担にならない。

今読み返すと実によく書いてくれたと思う。現在の生徒の中には、クラスに関心がなく、欠席している生徒の名前も分からなかったり、いやだと思ったら話しかけようともせず、

自分の小さな仲間だけで良しとしている。そのため、その仲間で仲違いしようものなら居場所がなくなってしまうことが多い。当時の生徒は「班ノート」の意味を理解してくれたのか、班毎に話しあい、それをクラスへと議論を発展させていった。

生徒が自分の考えを整理し、コミュニケーションができるようになると、教師側は「立派な社会人」として成長させるためにはどうすべきかいろいろ考え、班になげかけた。例えば、性に関する本を用意し、班でまわし感想を書かせ、班毎に話し合わせてからクラス討論させたりした。多感な青年期にしっかりと受け止め、前に進んでほしいと考えてのことだった。「自分を好きになる」このテーマも自分を受け入れ、自分に自信が持てるよう努力しようと考えさせていった。

また「高校生の子を持つ親へのメッセージ」として、機会あるごとに「親は高校生にどう接し、育てていくべきか」といったプリントを準備し、面談を待つ間等に読んでもらった。親にも成長し、躾けるときの拠り所を持って、自信を持ってもらいたいと考えた。

以上「班ノート」に始まった生徒に対する試み、親に対する試み、すべて私一人が考えて実施した訳ではなく、周りの多くの先生方から助言や資料をいただいてできたことである。教育を進める中で最も大切なことは勿論、生徒とのコミュニケーションであるが、それをより充実させていくものは、教師間あるいは、親との連携であると考えている。私は「班ノート」を通してある程度その目的を達成できたのではないかと思っている。

どうか先生方一人ひとりがそれぞれ工夫して、より良い生徒との関係を築いていただきたいと願っている。

栃木県立田沼高等学校　村井和子

生徒一人ひとりの頑張りを支える先生に

「小さな島国の日本が世界に誇れるものは何だろう。それは教育ではないだろうか。私は将来先生になって、子どもたちの教育に携わりたい。」中学校の卒業文集にそう書いた。小学校の頃から先生方に可愛がられ、一生懸命勉強することがとても大切なことだと思っていた。高校も一年生を終わる頃、期せずして伝統の運動部に入ってしまった。充分な能力のない身には苦しかった。とても辛かった。しかし素晴らしい指導者、仲間と出会い、歯を食いしばって頑張った。仲間と力を合わせること、あきらめずに頑張り通す事で夢が叶うことを学んだ。あきらめずに夢に向かって頑張ることの素晴らしさを、生徒と共に味わいたいと強く願って教職に就いた。

五校目の勤務校でS男の担任になった。部活動でも顧問になった。S男が高校で始めた部活動は、関東大会は勿論インターハイにも出場したことのある伝統の部であった。S男は電車を乗り継いで通い、部活動も休みがちではあったが一年次は何とか終了した。二年次になり、学校も部活動も休むことが多くなった。校則を破って指導を受けることも多くなった。私はS男の隣のクラスの担任であり、学年主任であった。ある日S男の担任から、進路変更を希望しているので会って欲しいと話があった。S男と母親に会って意思を確認をすると「はい。」と頷いた。「本当にそれでいいんだね。」と念を押した。S男は蚊の鳴くような小さな声で「学校にいられるんならやめたくない。」と言った。担任とも話し合い、S男には休まず学校に来ること、校則を守ること等を約束させた。やめたくないと思

いながら、頑張りきれないS男の踏ん張りどころだと思った。厳しい状況の中でもあきらめずに頑張り通して、願いを叶えることを学んで欲しいと思った。

三年次になり再び私が担任になった。一科目でも欠時数がオーバーしたら卒業はできないこと、校則違反があってもならないことを真剣に伝えた。これまでの夜型の生活習慣がすぐに改善することはなく、校則違反はしないものの先生方の指導を素直に聞くわけではなかったが、S男はS男なりに必死で卒業を目指した。多くの教科で欠時数を数えながらのハラハラの日々であったが、ぎりぎりのところで踏みとどまり卒業の要件を満たした。部活動でも関東大会にメンバーとして出場した。

卒業式の数日後、学年の先生方で祝う会を開いた。先生方から学年主任へと、スポーツサンダルに添えて、「下駄箱の神様へ」という感謝状をもらった。いつもまだ来ないS男を心配して、一日に何度も下駄箱を覗いては「早く来て」と祈っていた私をみんなは見ていた。S男を信じて認めてくれた校長先生や先生方。眠くて、辛くて理由を付けては駆け込んでいた保健室。いつも温かく応援してくれていたみんなに感謝の涙が止まらなかった。

今年の四月から病弱の特別支援学校に勤務している。疾病や障害を抱えながら懸命に頑張っている子どもたちと、その子どもたちを支える温かな先生方に囲まれ、命の尊さをしみじみ感じている。子どもたち一人ひとりの小さな声にしっかり耳を傾け、子どもたちの頑張りを支えることのできる先生でありたいと思っている。

栃木県立足利特別支援学校　猿　山　美　代　子